2007.11.28 ～ 2009.12.09 更新

11の講義内容　「西欧言語文化圏」と日本語文化（ギリシャ・トルコ・イタリアを中心に）

ギリシャ〔アテネ・ケア島〕〔スパルタ王レオニダス〕
トルコ　謎の黒曜石〔http://www.busitu.numazu-ct.ac.jp/mochizuki/japanese/sorcetk.htm〕
イタリア
マルコポーロ『東方見聞録』

この書物は、『世界の記述』（"La Description du Monde"）とも呼ばれ、写本名では、『百万』（"Il Milione"）というタイトルが付されてた四巻から成っている。

放送大学図書館の一八一八年の英語訳『東方見聞録』の解説〔http://lib.u-air.ac.jp/seiyou_nihon/tohokenbunroku.html〕に、「マルコ・ポーロがのちにジェノヴァで虜囚となったさいに、獄中でルスティケロに口述したものと言われています。もとはフランス語とも考えられる記録が十五世紀に最初に活字となったのは、一四七七年のドイツ語訳でした。その後十五世紀の印刷本としては一四八三年ごろのラテン訳、ヴェネツィアのセッサが上梓したイタリア語版が知られています」とある。

ジェノヴァ〔http://www.japanitalytravel.com/banner/genova/top.html#02〕

紀元前六世紀にはリグーリア人が住んでいたとされるジェノヴァは、ローマ帝国時代以前から海運を利用した交易活動を行い、地中海を守る役割を担ってきました。一一〇〇年頃に自治都市となり、ピサやヴェネツィアと並ぶイタリアの四大海運共和国の一つとして権勢をふるいます。最強と言われた船団を擁し、黒海での通商を独占するなどして富を得たジェノヴァは、"誇り高き都 la Superba"とも呼ばれていました。アメリカ大陸を発見したコロンブスが 14 世紀半ばに青年時代をジェノヴァで過ごしています。十六世紀のアンドレア・ドーリア総督の時代にはスペイン国王と同盟を結び、多くの貴族が金融業などで財をなし、ジェノヴァの"黄金時代"を築きました。その後、ナポレオン支配時代、サヴォイア王国時代を経て、近代イタリア統一に貢献したマッツィーニを輩出したジェノヴァは、現在もイタリア最大の港を誇り、イタリア産業において重要な役割を担っています。

マルコ・ポーロ（Marco Polo, 一二五四年九月十五日～ 一三二四年一月八日）コルチュラ島出身。

＝黄色い薔薇　「黄金の国ジパング」
黄金〔http://www.mainichi.co.jp/hanbai/nie/nazo_nihon15.html〕
ジパングの由来〔http://wedder.net/kotoba/japan.html〕
マンガ「」
〔http://www.nnet.ne.jp/~tatuyosi/kesen/index.html〕
〔http://www.nnet.ne.jp/~tatuyosi/tosyo/hazime0.html〕
〔http://jp.youtube.com/watch?v=WhcWYIDAG8o〕
〔http://www.tokyo-gas.co.jp/channel/200ch/flash/m2007_06_b_q.html〕

コルチュラ島〔http://kenichsberg.hp.infoseek.co.jp/korcula/korculaprofile.html〕

マルコ一族の島

「地球浪漫紀行」より
〔http://blog.goo.ne.jp/sekai-kikoh-2007/c/320db318f6d1ff9e1844e317c6e76596〕

ヴェネチィア

イタリア文化事情
支倉常長〔六右衛門長経（通称常長）〕伊達政宗公家臣「慶長遣欧使節」。
仙台市博物館・国宝（はせくらつねながぞう）
〔http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum/syuuzou/10_kenoushi/index.html#10a1〕

キューバの島で受戒
スペインの「椿」→「椿姫」
ローマ到着の季節は冬
常長の遺した「懐紙」
ヨーロッパに残った家来
主君政宗に献上したアラビア馬

遣欧使節　支倉常長〈2004年制作〉〔http://archive-www.smt.city.sendai.jp/kyozai/v99117.html〕
宮城県慶長使節船ミュージアム〔http://www.santjuan.or.jp/index.html〕

〔http://www.ayto-coriadelrio.es/apelljap.htm〕

［コラム］**支倉常長がヨーロッパにもたらした「椿」とは**

スペインに「赤い椿」、ローマに「白い椿」がもたらされ今日に至る経緯を解説。

中国では、「椿」の字は日本で云うところの「山茶花」を意味し、ヨーロッパ人は、そのことから「茶花」と混同していた。実際、常長一行は、太平洋を航海中に船内で実生の種から栽培しつつ向かっていた。今、スペインの歌劇「椿姫」は、このときの樹木が開花した花であることなど……。

繰り返して、日本では「つばき【椿】」は、「つらつらつばきつらつらに」と万葉時代から歌われ、韓国の全羅道域の山寺の寺院に自生することで、日本と朝鮮とでは同じ名であるが、中国は日本で云うところの「山茶花」、すなわち「茶」の木と誤ったことに発端する。実際には、中国の「香椿（チャンチン）（Xiangchun）学名 Toona sinenssis Roem.」を意味する樹木の名であることを知っておこう。

『荘子』（中国の戦国時代、紀元前三世紀頃成立）に、

上古、大椿なる者有り。八千歳を以て春と為し、八千歳を以て秋と為す。〔逍遙遊第一〕

とあって、長壽を意味する生命力あふれる常緑樹として神聖視されてきた樹木である。この樹木に朝鮮半島を経て渡来したであろう日本の「つばき【椿】」は、やはり神聖なる常磐木としてこの樹木を同定したことに機縁するのである。

『日本書紀』や『風土記』には、天皇が逆賊を討伐するときに用いる武器として、

「つばき」がその材と成ったという。「つばき」は悪を払う神聖な樹木として「卯杖」の素材となり神聖な木として息づいてきたのである。

さらに、「つばき」が『本草和名』〔十世紀の本草書〕にあって、「不老死」の薬名二十一種中に「海柘榴油」があって、「海柘榴」は「つばき」の漢名であり、ここからも「不老不死」のイメージが形成され、これを併せて用いたことに話は覃ぶのである。

《参考資料》
●松田毅一『慶長遣欧使節　徳川家康と南蛮人』（新装版）朝文社、2002年。
●太田尚樹『ヨーロッパに消えたサムライたち』角川書店、1999年。
●遠藤周作『侍』新潮文庫、1986年（支倉常長をモデルとした小説）。
●田中英道『支倉常長　武士、ローマを行進す』ミネルヴァ書房、2007年

http://tcc.itc.it/people/rocchi/fun/europe.html

イタリア文化会館東京　イタリア語